



連載 I
あの町この町
第52回

剛直と繊細

— 鹿児島県南九州市知覧町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀

(イラスト＝著者)

少年のころ、九州の南端部を地図で見るたびに何か恐いような気がした。カニの鉋のように半島が二つ突き出ている、一つは竜の頭と似ている。もう一つはワニの口のように尖っている。まん中に桜島といつて、いまでも火を吹く山がある。西郷隆盛というスゴイ人の出たところだ。竜の頭のところから特攻隊が飛び立った――。

九州新幹線ができて、福岡から鹿児島まで、もっとも速い便だと一時間十七分。朝、東京を発って夜遅く着くところが、お昼を少しまわった時刻に、すでに鹿児島島の駅頭で珈琲を飲んでいる。キツネにつままれた思いで、あらためて地図をながめた。あいかかわらずカニの鉋と似ているが、小犬がジャレ合っているようにも見える。南国の太陽はどこまでも明るく、桜島は稜線の上に白い噴煙をシルクハットのようにのせていた。

鹿児島中央駅前を出ると、バスは一路南下した。指宿スカイラインは薩摩半島の湾側の海岸と平行に走っていく。眺望のいい山沿いを行くので「スカイライン」の名がついたのだらうが、一時間ちかく走ってから文字どおり「スカイ」をめざすように山腹へと駆け上がり、そのまま走りつづける。斜面に茶畑がつづき、世に知られた「知覧茶」を思い出した。それにしてもこんな山並みの中に、どうして町があり得よう。きつとまた下りにかかって平地に出るにちがいない。そう思いかけたとたん、やにわに美しい通りに走りこんだ。山が切れた瞬間に、この身はすでに町内にいる。

通りのわきの用水路を澄んだ水が流れている。メインストリートは近年に整備されたのか、電柱が一本もなく定規をあてたようにまっすぐで、広大な空にひらいている。税務署、市役所、そのわきを川が横切り、緑の生け垣の通りへと入っていく。樹齢何百年かの老木がそびえ、辺りは静まり返っていて、耳をすますと川音が聞こえるようだ。またしてもキツネにつままれた思いがした。

江戸時代からの薩摩の歴史を知らない、山中に突如、風格のある町があらわれる理由がわからない。幕藩体制がとこのうのを見ずまして、江戸幕府は一国一城令を出した。一つの国に城は一つだけ、あとはすべて取り壊しを命じた。不穏な分子が根城にする余地を与えない。

これに対して外様大名の薩摩・島津氏は「外城」制をとった。藩内をこまかく分けて、それぞれは数村、大きいところは数十村を含み、「麓」あるいは「府下」と称した。行政府を御飯屋おひめやといつて、前の通りが「城馬場」、これが「本馬場」につづく。馬場は大路の意味で、そこに「外城衆中」(郷土)が居住していた。外城衆中はレッキとした藩士ながら緑をいただくのではなく、拝領した土地で農業を営み、一朝ことあれば武装して出陣する。いわば農民武士である。つねに幕府から警戒されていた薩摩は、本拠地の鶴丸城はごく貧弱な城郭にとどめ、領内一円に目に見えない防御のネットを張りめぐらせていた。

当初は領内に百二、最終的には百十三の外城があった。いまでも旧領内にあたる鹿児島県と宮崎県南部に、出水市麓町、加世田麓、吾平町麓、田代麓などの地名があつて、歴史的由緒をとどめている。知覧麓もその一つで、宝暦年間というから一八世紀半ばに、いま見るような形態がととのつた。

観光バスがつぎつぎとやってくる。知覧には旧外城侍の屋敷がよく残っていて、御仮屋跡につづく一帯が国選定・伝統的建造物群保存地区に、また建物に付属した庭園が文化財に指定されている。屋敷はスイカほどの大きさの切石や自然石の石垣で囲まれ、さらに石垣の上は杵ゆすなどの木の生け垣になっていて、中が見えない。門を入ると直角に曲がり、城郭に見る「枡形」のスタイルをとっており、屋敷そのものが防御の城のつくりになっていることが見てとれる。

柵をして立ち入りを断っているところもあるが、おおかたは庭園見物の門が開かれている。観光バス組は集団の強みで、こだわりなくドヤドヤと他人の家へ入っていく。団体組が消えると辺りが急に静まり、石垣と生け垣の通りが肅然とのびている。本馬場も枡形状に曲がついて、先が見通せない。そのせいか我知らず不思議な迷路に入りこんだ感じである。

道路が屈曲したところに「二ツ家」とよばれる村落の住居が移築されている。カギ形をしていて、これに納屋がついた。床の間の横に仏壇があつて、鴨居には天皇・皇后、また皇太子と妃の写眞が掲げてある。かつてはどの家にも見られた日常の風景だったにちがいない。

標高五〇〇メートルにちかい高台にあつて知覧麓は孤立したけはいだが、むろん軍用路を兼ねた道が八方にのび、ほかの外城と結ばれていた。町の南部は木佐貫原きさぬきぼらといって、広大な台地がひろがり、ゆるやかに南海へと下っていく。この独特の地形が昭和になって、町の運命を大きく変えた。



外城侍の屋敷門

鹿児島県はもともと本州最南端という地理的条件によって、軍事的に重要な役割を果たしてきた。アメリカとの開戦に突入した真珠湾攻撃は、鹿児島県の錦江湾を訓練地にしたし、南方への中継ぎをする兵站地へいざんち、また後方基地として重視されてきた。昭和十七年（一九四二）、知覧町郊外の木佐貫原に陸軍の飛行訓練所がつくられた。航空兵養成のための施設であつて、そのかぎりでは県内のいたるところにあつた軍事関係の施設の一つにすぎない。だが昭和二十年（一九四五）、ここが特攻隊出撃の本部となり、以来、日本人の記憶のなかで「知覧」が特攻隊と同義語になった。

最初の海軍特攻隊が編成されたのは昭和十九年十月である。先立ってマリアナ沖海戦の敗北。戦略的要衝だったサイパンが陥落。さらにレイ

テ沖海戦でも敗れ、「無敵」を豪語していた連合艦隊は壊滅状態になった。苦しき海軍のあみ出したのが飛行機による特攻作戦であって、それがいかに展望のない神だのみの作戦だったかは、公式にも「神風特別攻撃隊」と称し、最初の四隊が「敷島隊」「大和隊」「朝日隊」「山桜隊」と名づけられたことからわかるだろう。本居官長の「しき島の やま」ところを 人とはば 朝日ににほふ 山ざくら花」にちなんでいる。古歌によって雅びやかに命名し、死を運命づけて送り出した。

昭和二十年三月、アメリカ軍沖繩諸島に上陸。追いつめられた大本営は特攻隊を陸軍でも編成することとなり、南九州の飛行訓練所に白羽の矢が立った。特攻作戦は敗戦の八月までつづけられ、一〇三六人の若者が飛び立って二度と帰らなかった。ちなみに海軍は二五二人。軍部は



特攻隊員

戦死とはいわず「散華^{さんげ}」といった。新明解国語辞典によると、「花と散ること（戦死を美化した表現）」である。

台地の裾をまわりこむかたちには広い道がのびていて、両側に石灯籠が並んでいる。戦後、知覧特攻慰霊顕彰会がつくられ、一〇三六人の霊をまつる一〇三六の石灯籠をよびかけたところ、たちまちその数をこえたという。広場と桜並木、大駐車場、奥に特攻平和観音堂。本尊は法隆寺の「夢違い観音」を模したそうだ。悪い夢を良い夢に変えるホトケというが、まったく遺族にとっては、いまでもって悪夢としか思えないだろう。

駐車場に大型バスが入りして、つぎつぎと人の列がやってくる。平和会館には隊員たちの遺書、日記、手紙、寄せ書き、写真などが展示されていて、制服の中学生や高校生が神妙な顔で見つめている。

「悠久の大義」「神国不滅」「護国の霊」「堅忍不拔」……。隊員のおおかたは十七歳から二十歳前後。書きのこしたものに判でおしたように出てくるのは、時代の常套句であって、ことごとくに指導者たちが口にしていたのだろう。それはとりわけ若い、純な心を呪縛した。美辞麗句というしかない常套句を通して、「大東亜戦争」なるものの特異さ、異様さがまざまざと見えてくる。

テレビが特攻攻撃の実写フィルムを流していた。むろんアメリカ軍が撮ったもので、一定の間隔をとりながら、まっしぐらに戦闘機が飛んでくる。当初はたしかに一定の戦果があった。人間の操縦する飛行機が、まさかそのまま軍艦に突っこんでくるなどとアメリカ軍は思わなかったからだ。だが肉弾作戦を見きわめると、対策も早かった。実写フィルムでは、飛来してくる戦闘機を高射砲が狙いを定め、まるでゲームのように射ち落としていく。

特攻隊員は戦中こそヒーローだったが、戦後は「特攻帰り」の名^{あな}で侮りを受けた。考えのない無鉄砲な突貫小僧を意味しており、遺族は二重の苦しみにさらされた。ちなみに宮本雅史『特攻』と遺族の戦後』（角

川書店)には、遺族に届いた一枚の明細書が引用されている。死亡通知書についていたもので、「葬祭料67円50銭、供物料100円、召集旅費7円60銭、家族出頭費3円85銭」、空欄に400円とあって、計578円95銭。つまりこれが国家の認定した一つの命の値段だった。

重い心で山裾の道をもどっていった。南国の空はあくまで明るく、緑が濃い。まるで自分がいま白昼夢を見ているような気がしてくる。そういえば遺品の中に詩のような記述があった。

あんまり緑が美しい

今日これから

死に行く事すら

忘れてしまえそうさ。

富山県出身の二十二歳の青年は、昭和二十年六月六日に出撃して戦死した。飛び立つ前にしたためた遺書につづられている。

真青な空

ぼかんと浮ぶ雲

六月の知覧は

もうセミの声がして

夏を思わせる

小鳥がしきりにさえずっていたのだろう。仲間の隊員が小声で言った。「俺もこんどは小鳥になるよ」。出撃していった青年たちには、ほとんど死の意識はなかったのではなからうか。まだ生きていることのほうが不思議に思えたかもしれない。ひとときあと、一切の思いを絶ち切るようにしてプロペラの轟音につつまれた。

それにしても歴史はおりおり意地の悪いいたずらをする。軍部が知覧を特攻本部にしたのは地理的条件によってだが、散華―花と散る―散らん―知覧でもあって、地名がそのまま運命の糸ときつく結ばれているのである。

「特攻」のイメージが強すぎて隠れているが、知覧は元来、いたって生産性の高い土地なのだ。外城が置かれたのも豊饒の地を見こしてのこと。薩摩を発祥とするサツマイモはもとより、いまも野生の茶樹が見られ、知覧茶のはじまりを伝えている。県茶業試験場があって、紅茶栽培を奨励した結果、現在はお茶よりも紅茶の生産がずっと多い。タバコ栽培は少なくなったが、代わって畜産が活発になった。なにしろ南面にひらけた広大な台地なのだ。さらに海岸部には「塩屋」や「浦」をいたたく地名がちらばっており、古くから漁場としてひらけてきた。山の幸、野の幸、海の幸がほどよくバランスをとって暮らしをいろどってきた。「ミュージアム知覧」には驚くほど多岐にわたる民俗資料が展示されていたが、それだけ豊かな土地柄が見てとれた。

もしかすると「薩摩っぽ」といった大ざっぱな言い方がいけないのかもしれない。十把ひとからげに男くさいのでまとめた表現である。さらに薩摩名産が、からいも、ぶんたん、さとうきび、さつま白浪ときている。剛直で野太い声や、もみ上げの長い色黒の赤ら顔を思い浮かべても、そこに繊細な神経は見えないものだ。黒い影と、奇妙なまでの静けさを思ったりしない。

だが鹿児島を訪れ、夜の海岸に立ち、夜ふけの桜島を見ると、見方、考え方がかわるだろう。キラキラした月波の向こうに、凝然と怪異な火の山がそそり立っている。海面から突き出て、左右に稜線を引いている。その線が途中でプツリと切れて、不格好に折れ曲がり、まん中に巨大な噴火口をかかえ、まわりには樹木一つなく草もない。

火の山であって同時に死の山である。たえず噴煙につつまれた凶暴な荒れ山だ。薩摩隼人(はやと)はそんな山をながめて育った。西欧には「月光は狂気をもたらす」という意味の言い方があるが、月の光の下にながめた死の山は、もの狂しい思いを呼びおこさないだろうか。のこされている西郷隆盛のエピソードからも推測できるが、人なつっこさの反面、いつも



知覧の旧外城

深い孤独感を抱いていたようだ。若いころ月照という若い僧とともに錦江湾に身を投じた。煩悶のはてといわれているが、むしろ月の光にさそわれてのことだったかもしれない。かたわらに生ま身の「月照」がいたとしたら、何としても足下の錦江に飛ばなくてはならぬ。それは武人以上に詩人の作法というものだ。

薄闇のひろがる夕方、旧外城衆中の通りは静まり返っていた。あいだに小路をまじえた石垣と生け垣の別天地は、強い使命感とともに繊細な美意識のもとに形成されている。外城侍たちは「輪番りんぱん」というローテーションで城下に出府した。そして同僚たちと語り、新しい情報を交換した。剛直と繊細を合わせもつ武家屋敷の様相が、農民にして武人の姿をとどめている。

民俗資料の一つに「天吹てんぶく」という楽器があった。竹でできていて尺八と似ているが、ずっと小さい。小さいながら音はリョウリョウと鳴りひびいて、尺八よりもなお哀切なものがあつたという。取り入れが終わると、誇り高い外城侍たちは月光の下でそんな楽器を吹き鳴らしていたかもしれない。

麓川の水が水路に導いてあって、メインストリート沿いに水の帯をつくっている。伝統のある町に通例だが、和菓子のお店が品のいいアン物をつくっており、二つばかりいただいで、気持ちのいい夕暮れのなかバスを待っていた。そのうち我慢できず、包みをひらいてパクついた。こしのあるモチのような感触で、ほどのいい甘みが口中にひろがった。すぐ前の店先に青くて丸いものが段ボールに積んであつた。マクワ瓜らしく、西郷ドンのお腹のように丸々している。そのふくらみと重量感に、自分が南国にいたことをあらためて実感した。

(いけうち おさむ)

付記。遺書の引用は高岡修編『新編知覧特別攻撃隊』(ジャプラン刊)による。